

## はじめに

中国地方には規模は小さいながらも、いくつかの歴史の古い都市が存在する。そのような都市は、しばしば観光都市となっており、少なからぬ観光客が訪れている。財団法人日本交通公社の『旅行者動向 二〇〇五』によつて旅行先ごとに旅行タイプを見ると、周遊観光の割合が中国五県では、岡山県が一七・三パーセントでやや低い値を示している他は、二〇・三五パーセントと高率になっている(全国平均は一八・二パーセント)。筆者の印象でも、中国地方においては従来型の観光の形態が主流である。しかしながら、少しずつ新しい観光の動きもでてきているので、筆者の地元地域である山陰のいくつかの地域について、都市の魅力づくりには欠かせないホスピタリティの醸成とも関連づけつつ報告してみたい。

### 松江市の堀川遊覧船と 体験型観光

島根県の県庁所在地である松江は、関ヶ原の戦の後に、遠江の浜松から能義郡広瀬の喜田

# 歴史の古い都市の オルタナティブ・ツーリズム

山陰地方の観光都市を事例として

林 秀司

Written by Shushi Hayashi

城に入つて出雲・隠岐を支配することになつた堀尾吉晴・忠氏父子が、ここに新たな城地を定め、築城を始めた一六〇七年(慶長一二)に、その城下町としての起源を求めることができる。松江城は一六一一年(慶長一六)にいちおうの完成をみるが、その後二年で堀尾家が断絶し、ついで入部した京極家も四年でとだえた。結局、松江は、一六三八年(寛永一五)から廃藩置県までの二三三年間、信州の松本から入つて出雲一八万六千石を支配することとなつた松平家の城下町として発展した。

松江は、宍道湖に面し、江戸時代からの堀割も残る「水都」である。松江城には江戸時代の天守閣が現存し、武家屋敷地区とともに歴史的な観光資源となっている。また、古代出雲文化の中心地といわれる歴史性も有している。さらに、六代松平治郷は不昧公の名で慕われ、茶や花の作法にたけていたとされ、現在でも松江では茶道や華道が盛んである。明治時代には、一八九〇年に、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が中学校の英語教師として赴任し、短期間ながらも松江で暮らした。後に『知られざる日本の面影』などで松江を紹介しており、彼は今でも市民に愛される存在である。松江は、こうした文化性も兼ね備えているといえよう。松江・しんじ湖温泉も重要な観光資源である。

松江市は、早くから観光振興に取り組んできた。一九五一年には国際文化観光都市となり、一九八七年には松江・出雲国際観光モデル地区、一九九四年には国際会議観光都市に指定されている。近年は観光施設の整備も相次

いだ。一九九九年には、島根県立美術館が宍道湖岸に開館し、二〇〇一年には、ルイス・C・ティファニー庭園とイングリッド・シユガートンの複合施設である松江ウォーター・ヴィレッジ、および、花と鳥をテーマとした松江フォーゲルパークがオープンした。松江市の観光客入込数は、島根県観光動態調査結果によると、二〇〇四年は七七一六〇〇〇人であり(二〇〇五年三月三十一日に松江市は周辺七町村と合併したが、この数値には、これら七町村の入込数を含む)、山陰では有数の観光都市といえる。

現在、松江市における観光のひとつの核になっているのが堀川遊覧船である。これは、松江城をとりまく堀割を二人乗りの船で約五〇分かけて遊覧するもので、一九九七年七月に運行が始まった。一九九七年に六万四〇〇〇人であった利用客は、二〇〇二年には三四万五〇〇〇人に達した。遊覧船の船頭は、「シルバール」が担当している。当初は録音テープを使っていたという船内でのガイドも、現在は船頭の肉声によるものに替わり、ときには歌も披露されるなど、観光客にとってより親しみのもてるものになっている。また、コース周辺の住民には、家の中が見えるなどの理由で遊覧船の就航に反対する人も多かったというが、今では堀川に面して花を植えるなど、地域住民の協力は大きい。

多くの観光客が訪れる松江市であるが、近年、パッケージツアーは少なくなっており、パッケージツアーであっても現地では自由行動となっている場合が多いという。そこで、二〇〇一年から、体験型の観光メニューをつくって提供し始め

た。和菓子づくり体験や茶のお点前体験、そば打ち体験、利き酒体験など、地域の特徴を生かしたさまざまなメニューがある。例えば、老舗の菓子職人から指導を受け、自分の手で和菓子をつくる体験は、新鮮で、楽しいものである。

### 石見銀山の 住民主体の地域づくり

島根県にとって、近年の大きな話題のひとつは、県中央部の大田市にある石見銀山の世界遺産登録の動きであろう。二〇〇六年一月には、ユネスコは日本政府が提出した石見銀山遺跡の世界遺産登録推薦書を正式に受理した。二〇〇七年七月にはユネスコ世界遺産委員会で登録の可否が決まるものと思われる。石見銀山は、一六世紀初めから二〇世紀初めにかけて採掘が行われた鉱山遺跡であり、文字通りヘリテージ・ツーリズムのフィールドといえる。石見銀山はとくに一六世紀から一七世紀にかけて大量の銀を産出した。当時、世界における銀生産量の三分の一を日本が占めていたが、そのかなりの部分が石見銀山の銀であったと推測されている。また、ふもとの大森町は地域の

行政的中心として栄えた歴史的町並みが残り、重要伝統的建造物群保存地区となっている。世界遺産として登録申請されたのは、鉱山遺跡と町並みに銀の積み出しや物資の搬入のために使われた港と街道を加えた地区である。

しばしばヘリテージ・ツーリズムは、大衆的観光との矛盾が露呈しやすいといわれるが、新聞報道等によると、すでに旅行業界の関心も高まっているという。そうした中で、地元市民も参加する「石見銀山協働会議」が、遺跡の保全や観光客の受け入れなどについて議論を進めるなど、市民レベルでの世界遺産登録に向けた体勢づくりも盛んになってきた。もとより官民



松江市の堀川遊覧船



かつての武家屋敷跡などがある塩見縄手

が協力して、遺跡の保全には早くから取り組んできた地域である。一九五七年に、大森町文化財保存会が結成され、一九六九年に、現在は唯一公開されている坑道である龍源寺間歩などが国指定史跡となった。一九八七年には、町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定された。現在、博物館機能をもった施設としては

石見銀山資料館があるが、これは地元有志により発足した大森観光開発協会が、旧遺摩郡役所(旧代官所跡)を市から譲り受けて運営しているものである。石見銀山観光ボランティアガイドは二〇〇〇年に結成され、近年、さらにガイドの養成が進んでいる。

島根県観光動態調査結果によると、石見銀山の観光客入込のべ数は概して増加傾向にあり、二〇〇四年には三二万八〇〇〇人であった。重要伝統的建造物群保存地区の修理・修景は進み、趣のある町並みが整いつつある。週末ともなると、町並みを散策する多くの観光客でにぎわう。町を気に入って若者や芸術家たちが集まるようにもなったという。その背景には、必ずしも観光を業とはしない地元の人々や企業も、来訪者を自分たちの暮らしの中に暖かく迎え入れるという余裕をもっているように思われる。

### 萩市のまちづくりの仕組み

山口県萩市は城下町起源であり、萩の歴史は、毛利輝元が築城を始めた一六〇四年(慶長九)にさかのぼる。江戸時代末には、吉田松陰をはじめ、木戸孝允、高杉晋作ら明治維新を推進した志士を多数輩出した。明治時代には、土族授産としてその栽培が奨励されたため、武家屋敷の中にナツミカンが栽培される独特の景観を形づくった。萩市は、このような歴史

とその史跡を資源とした観光都市といえる。山口県観光動態調査結果によると、二〇〇四年の萩市の観光客数は一四二万八〇〇〇人であった。

萩市の観光資源のひとつとなっている歴史的町並み保存の取り組みは、一九七二年の歴史的景観保存条例の制定に始まる。景観保全のための条例制定は、一九六八年の金沢市と倉敷市が全国でも最初であり、萩市の条例制定は、京都市や高山市とともにそれに次ぎ、全国的にも初期の取り組みといえる。また、一九七五年に伝統的建造物群保存地区制度が発足すると、いち早く、一九七六年には、堀内地区と平安古地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定された。一九九〇年には、歴史的景観保存条例を都市景観条例へと拡充している。さらに、二〇〇五年には、景観法に基づく景観行政団体となった。このように萩市は、先駆的で積極的な景観保全・形成の取り組みを行ってきた。なお、二〇〇一年には、浜崎地区が新たに重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

堀内地区は、旧萩城の三の丸にあたる武家屋敷地区である。かつて藩の重臣たちが住んだ武家屋敷も、明治時代に入って彼らが転出すると、長屋門や土塀と必要な建屋を残して多くの家屋を倒し、空き地にナツミカンを植栽したという。その広々とした空間に旧益田家物見矢倉や旧周布家長屋門などの歴史的建造物が点々と残っている。平安古地区も武家屋敷地区であった。一方、浜崎地区は、萩の城下

町形成の初期に開かれた港町であり、廻船業と水産業で栄えたという。これらの他に、堀内地区の東側一帯も、かつては豪商や藩士が住んでいたところだ。多くの観光客が訪れている。

このように、多くの歴史的な資源を有する萩市であるが、堀内地区内の大野毛利家上屋敷跡には萩博物館が建設され、二〇〇四年一月に開館した。これは「エコミュージアムの手法を取り入れた、萩まちじゅう博物館」の中核施設としての役割も担っている。「エコミュージアム」とは、一九七〇年代のフランスに起源をもつ博物館の新しい形態である。地域住民の協力のもと、地域資源を現地で保存し、展示していくものである。萩市では、この取り組みを、「ア博物館の機能を明確化し、地域の空間演出を重視したものと捉え、「フィールドミュージアム」という用語を用いている。「萩まちじゅう博物館条例」は二〇〇四年四月一日から施行され、その成否は今後の取り組みにかかっているといえ、おおいに注目され、かつ期待されるものである。

こうした仕組みづくりとともに萩市には、地

域住民のさまざまな主体的取り組みが見られる。例えば、ボランティアガイドの団体として、萩観光ボランティア協会、萩観光ボランティアの会、構見どころ案内人やNPO萩まちじゅう博物館の「まち博ガイド部会」などがあり、観光客のガイドを行っている。□羽家住宅をはじめ、おもな文化財にはボランティアガイドが常駐しており、来訪者に懇切な説明をしてくれる。その他にも、各地の住民グループが来訪者へのガイドに取り組んでいる場合もあるという。浜崎地区では、地元住民グループの「浜崎しゅちよる会」を中心に、毎年五月に「浜崎おたから博物館」といった取り組みも行われている。これは、家々に残る自慢の「宝」を一般公開するもので、地域をあげた温かみのあるイベントとなっている。

## おわりに

ここで取り上げた事例がオルタナティブ・ツーリズムといえるかどうかは議論の余地もあると

思われるが、山陰地方の歴史の古い小都市においても、従来とは異なる観光の形態が見られるようになってきたとはいえるであろう。そしてここでは、来訪者を受け入れる地域住民の主体的な活動が芽生えている。ホステタリティは、ホストと観光者の相互作用、「コミュニケーション過程の一種として捉えることができる」(『観光学辞典』)。こうした地域住民の活動によって、表面的ではない住民と観光客との交流が生じている。再び「旅行者動向二〇〇五」によると、松江市は、来訪者経験者からの評価が高い潜在型観光地であるという。これからは、このような人と人との交流が観光客を引きつけるのではなからうか。

□林 秀司(はやし・しゅうじ)

島根県立大学総合政策学部助教授。専門は人文地理学。一九六三年生まれ。筑波大学大学院博士課程地球科学研究科地理学・水文学専攻単位取得退学。九州大学大学院比較社会文化研究科助手を経て、二〇〇〇年より島根県立大学総合政策学部講師、〇四年四月より現職。島根県景観アドバイザーも務めている。